

宮崎道生編 『新井白石の現代的考察』

蝦名庸一

昭和六十年はいろいろな点から一つの節目といわれているが、はしくもまた新井白石（一六五七―一七二五）の歿後二六〇年に相当する。

本書はかかる記念すべき年に当り、白石研究の第一人者である宮崎道生博士（弘前大学国史研究会顧問）によって国内・国外の研究者の協力を得て編まれた記念論集である。編者が「あとがき」で述べているように、国際人であった白石にふさわしく、国内では五人の学者、飯田瑞穂・永積洋子・播磨定男・三宅英利の諸氏、国外では韓国の李元植、オーストラリアのアクロイド、西ドイツのゴッホ、フランスのエライユ、イタリヤのヴァロータ、アメリカの中井ケイトの六人の寄稿を求めて、執筆者の面でも国際性を発揮したこれまで白石研究書としては類例を見ない書物である。

本論集は、日本史学会の長老である坂本太郎博士の序文にはじまり、第一部（論文五篇）・第二部（論文六篇）・年譜・あとがきの順に構成されている。まず第一部は宮崎道生氏の論文「新井白石の史学と地理学―白石学の普遍学性・先駆性・国際性―」ではじまる。その序説において「近世において白石に比すべき博学者・国際人は存在しなかったと言っても差支えないと思う」と述べて、白石に対する傾倒が、この論集を生

み出した原動力になったことをうかがわせる。そして白石の史学と地理学を中心にその学問の特色を概観することによって以下の諸論文の序論的意味を持たせている。白石の史学については、時務的関心とあわせて学問的良心の鋭さを強調し、さらにその公平な史観をあげる。白石が先人の業績を可能な限り綿密に調査研究し、その史料文献を駆使してその史学が形成されたことをあとづけ、さらにその著わした『古史通』『読史余論』『藩翰譜』等の史書が、歿後も学界へ影響するところ多大であったことを例証している。例えば、邪馬台国の所在の問題や大化改新を論ずる場合、白石の論説を今日でも無視するわけにいかないという事実がそれを証明するという。

白石の地理学については、歴史地理学と呼ぶのが適切とした上で、世界地理学と日本地理学に分けて考察している。前者の地理書としては『采覧異言』と『西洋紀聞』を主にとり上げて両書の比較すなわち相違点と相補性を論じている。後者日本地理学の分野では、原始時代・古代・中世近世（一括）の順に白石の地理学を検討する。その中で『蝦夷志』図説中の「渡島津軽津」の位置を北海道に属するものと認めているのが注目される。結語として白石の人と学問との国際性について、それは自らが国際人であろうと努力した面と、外国側から国際人と認められたこととの両面を通して考察している。宮崎論文はかくして白石の学問の主として史学と地理学を通してその全体像を概観したものとなっている。

第二論文は、播磨定男氏の「正徳の改貨事業」である。改貨事業は日鮮外交の刷新とともに白石の政治的業績の一つとして著名であるが、播磨論文は白石が金銀貨の改良策を採るに至った経緯を述べ、さらに改貨

事業を通して白石の経済・政治思想に触れる。それまで悪貨政策を推進した勘定奉行萩原重秀を生命を賭して弾劾してこれを退け、自ら『改貨幣』を草して幣制改革に乗り出すわけであるが、彼の貨幣改良政策は経済理論からの考察よりも「当時の政治的要求から専ら現実的な物価との関係で論じられ」たことに特徴があるとし、根底には白石の「経験主義的な合理的思惟が存したことを認めることができる」という。こうして「現実への志向をもって当時の実際的要求に応えようとした」白石の態度は、一般的に事実とは無関係に理論的合一を重しとする儒者の中で「時流を抽ん出していた証左」であるとす。

第三論文は永積洋子氏の「正徳新令とオランダ貿易」である。これは「従来殆ど研究されていない、正徳新令がオランダ貿易に及ぼした影響について」考察したものである。正徳新令制定の事情として、宝永六年（一七〇九）以後、銅が不足し、貿易が停滞したことにつき長崎奉行が訴えたことが、貿易改革の主要な動機となったと説き、銅によるオランダ貿易の実情や経過を『商館日記』やオランダ商館長を勤めたヤコブ・ファン・ワイエンの覚書を史料として述べる。かくして正徳五年（一七一五）正徳新令がオランダ人に伝達されるに至るが、その経緯・内容や取引の実態を、オランダ側の記録を主に参照して論述しているのが特色である。要するに「正徳新令が、貨幣・銅・取引方法のいずれの点でも、オランダ貿易に大きな変化をもたらさなかった」とし、新令の規定は、以前からの政策の継続であったから、そのまま受け入れられたとするのである。しかし来航船数の二隻への制限が、日本貿易の魅力を減じさせたとしている。そして白石が貿易改正に果たした役割が大きかったのにか

かわらず、『商館長日記』に白石が登場するのは一度だけであるとし、これは商館長が白石の果たした役割を全く知らなかったことによるという。オランダ語をよく解する執筆者ならではの指摘である。

第四論文の三宅英利氏「朝鮮官人の白石像」は、対外交渉史研究の立場から、白石の朝鮮通信使制度改革を朝鮮官人がいかにとらえ、評価していたかを明らかにしたものである。朝鮮側の史料を数多く精査することによって、正徳信使が白石の学才は高く評価しながらも、途中における相づく改変の通告、とりわけ犯諱国書をめぐって強硬な白石の姿勢に接し、不信と非難さらには憎悪にまで増幅されていたのではなからうかと推測している。日本の政情からの論説が多いだけに、新しい視点での考察といえよう。

第五論文は李元植氏の「新井白石と朝鮮通信使―筆談と唱和を中心に―」である。政治外交面での白石と通信使との応酬のほかに、この論文は白石の『陶情詩集』『白石詩草』に寄せた朝鮮通信使の序文と跋語、ならびに『江関筆談』を中心に、通信使の紀行録と照らし合わせながら、当時の交歓模様をさぐる。それと同時に、白石の詩人的活動に焦点をあてたものである。坂本博士が本書の序で李氏の論文を賞讃しているように『白石全集』第五巻所収の「白石詩草」の文字の誤りを訂正したり、史料の点で細かい配慮を払っていることも特色である。本論文の終りの方で、李氏が京都の古書肆でみつけたという白石の肉筆詩箋を紹介し「白石先生余稿」収録の詩文との異同に及んでいるのも面白い。

第二部は宮崎道生氏の「新井白石と洋学者」を筆頭に、第二論文以下はすべて国外の諸学者の論文を収める。先ず宮崎論文は、白石を蘭学を

包含した洋学の開創者とし、白石の西洋学と近世後半期の洋学者すなわち杉田玄白・大槻玄沢・山村昌永・林子平・渡辺華山らとの関係及び影響、さらには近代、明治・大正期の学者・ジャーナリストである福沢諭吉・田口鼎軒・藤田茂吉・徳富蘇峯・森鷗外・吉野作造・新村出らとの関係並びに影響、これら後の学者の白石評を概観する。すべてこれまでの丹念な調査研究の累積の成果といえる。

第二部第二論文はウルリヒ・ゴッホ氏（ルール大学東アジア研究所講師）の「『読史余論』における時代区分の分析」である。白石の時代区分は九変と五変の組み合わせによって規定されているとし、これは中国の易経の爻の数の「九五」に由来するという独創的な見解を述べている。そして「数の組み合わせによって歴史を区分する時代区分においては、意欲的な整序構想が歴史に適用され、先験的に知られた規準で歴史が有意義的に解釈されることが予期される」という。そして一般的には武家支配、特に徳川家の支配と、最終的には家宣と白石の協力体制の正当化の書として『読史余論』を位置づけている。

第三論文はフランシーヌ・エライユ氏（パリ大学教授）の「『読史余論』における「政」と「権」について」である。二つの系列の用語すなわち一方は「まつりごと」とその合成語、「政務・政道・善政・徳政」を、もう一方は「権」（権力）とその合成語、「権威・権勢・専権」を考察し、さまざまな史料の用例を集めて「まつりごと」は武士よりは朝廷に関する記載に多く見えたとする。天皇の政は統治する者を適切に選ぶことに意味があると解され、「まつりごと」を実際に行う「権」力の用法の検討にうつる。権は力を伴う政であるし、白石は天皇家に

対して「権」、武力、権力を屬性として付与することがなかったとみる。権力の欠如によって示されている天皇の無責任性を保護しなければならないと、白石は感じていたのであろうかと推測している。まさに白石の現代的考察である。

第四論文はジョイス・アクロイド氏（クイーンズランド大学名誉教授）の「碧眼で見た『折たく柴の記』」である。アクロイド教授は英訳したことこの経験をふまえて本書の持つ文学的記録文書の価値を高く評価しながらも、その内容、用いられた資料、自叙伝としての性格を吟味する。そして「白石の一方的な狭い視野から書かれており、自分の立場の正しかったことを弁護するために記述されたものであると断言できる」としているのは、やや性急な結論ではなからうか。しかし、また一方で「折たく柴の記」を山本常朝の『葉隠』と対比し、ともに主君に対する忠誠・献身の精神が見られることから武士道の古典として扱っていることは着想として面白いものを感じる。

第五論文はケイト・ワイルドマン・ナカイ氏（上智大学助教）の「白石史学の政治的性格―『古史通』の場合を中心にして―」である。白石史学は高度に党派的なもので、彼の著した史書はすべて「この実践的プログラムとの密接な関連において書かれ」政治目的の達成を目ざしたものとす。その一貫して追及した政治目的は「徳川將軍をして、中国儒教の伝統に則る君主に変容せしめ、文武・聖俗のすべての権力を一手に収めた、真の「国王」たらしめることにあった」という。『古史通』において「天孫降臨」説を解体し、天皇を再び人間の位置に引きもどさうとしたのも、將軍をして日本の唯一の君主とする理論的基盤を作り出

すことを目指したものと考察している。そして複雑な史料の操作をして「天皇」と将軍「国王」の間の「禅譲」の筋書を作ったとみている。

第六論文はアレックスandro・ヴァロータ氏（ピサ大学教授）の「新井白石の『西洋紀聞』について」である。先ず白石が本書を書いた動機にさかのぼる。それはイタリアの宣教師シドチとの出会いとその悲劇的な死であり、白石の経世家としての意識であったとする。ついで『西洋紀聞』の内容を検討し、白石のキリスト教批判が東洋と西洋のものとの考え方の違いを典型的に現わすものとして、特に関心を引くと述べ、さらにシドチが日本人と中国人の国民性の比較を試みた件り日本人は比較的円満で異文化を包容するのに対し、中国人はやや優越感を抱くことから西洋文化に抵抗力を持つとする一に興味を感じている。しかしヴァロータ氏は宮崎氏の『新訂西洋紀聞』（昭和四十三年刊）をイタリア語に翻訳しているだけに、基調として宮崎氏の研究に負う面が多いように見受けられた。

最後は飯田瑞穂氏（中央大学教授）の手になる「新井白石年譜」であるが、従来のものを参考にしながらも、新しい知見を盛り込んでいるようである。坂本太郎博士は「序」で、克明緻密な氏の学風を遺憾なく発揮したものと評価されている。

以上各論文を要約紹介したものの、極めて不十分であり、読後の印象の一部を記したに過ぎない。しかし、要するに本書は新井白石の研究ですぐれた実績をすでに残している。編者宮崎氏の論文を基調に、内外の学者の協力によって多面的に白石をとらえ、その全貌に迫ろうとした所に特色がある。ただ執筆者によってそのアプローチの仕方にも自ずから

精密度の違いがあるように思われるが、国外の学者がこれだけ精緻に白石を研究していることに一驚するのである。坂井栄八郎・菅野三重両氏担当の訳文は、苦勞のあとがしのばれ、流麗で読み易い。

終りに参考までに誤植と見られるものを指摘しておきたい。ヴァロータ氏の論文の中『西洋紀聞』を引用している箇所（二六二ページ九行）で「其真情敗、露はれて」は「敗、露はれて」であろうし、二七〇ページ九行の「新取精神」は「進取精神」とするのが正しい用語かと思われる。

いよいよ国際化が進む現代において、白石研究者の国際的協力によって本書が成ったことは、これからの日本歴史研究に刺激を与えたとともに、そのあり方をも示唆するものとして、まことに意義あるものといえよう。

（四六判・三〇四頁、二六〇〇円、吉川弘文館、昭和六〇年）

（青森県立弘前中央高等学校校長）